

## 読み方から教えるのが最善 脳の働く経路が異なる

私は、幼児期～小学校低学年の子供に(延べ数十万人を数えます)、次のような実験を試みています。これによっても、「漢字の読み」を教えるのは、この時期がもっとも適当という結論を得ています。

実験では、「中」「虫」「蟻」と書いたカードを用意します。そしてまず、それぞれのカードを見せながら、私が、「なか」「むし」「あり」と読みあげます。次に、カードを見せながら、子供たち自身に読みあげてもらいます。

その結果、子供たちは、どの漢字の読み方をいちばん覚えていたと思いますか。正解は「蟻」です。次に「虫」、その次に「中」の順となります。

自分の生活の中で具体的に知っている「蟻」にもっとも興味が引かれると同時に、先ほども述べたように、字形が複雑で記憶の手掛かりが多いので、いちばん覚えやすいのです。

「虫」は抽象的な言葉であり、虫そのものは存在しませんから、実際に存在する「蟻」よりも覚えにくいのだと思います。同じく「虫」と「中」では、字形のより複雑な「虫」のほうが覚えやすいので、こちらに軍配があがったのだと思われます。ですから、教えるときは、「蟻」「虫」

「中」の順にするのが得策です。

もう一問。「九」「鳥」「鳩」では、どの漢字をいちばんよく覚えていたでしょうか。そうです。ほとんど例外なく「鳩」「鳥」「九」の順で覚えていきます。

具体的に馴染みのある物であれば、字画の多い漢字でも、読むのを物ともしないのは、見た物をそのまま記憶できる丸暗記能力に優れた、小学校低学年までの時期ならではの得意技です。このすばらしい子供の得意技を生かさない手はありません。にもかかわらず、それをしてこなかったのが、漢字教育の実情なのです。

なお、漢字を「読む」のと「書く」のとでは、それを処理する脳の経路が異なります。

漢字を「読む」のは、「目で見える」「意味を理解する」という単純な経路で済むのに比べて、漢字を「書く」のは、書こうとする漢字を「音でとらえる」それを「目に見える形にする(全体像をとらえる)」「漢字に組み立てる」「手の動きの記憶につなげる」という複雑な経路をたどることになります。それだけに、私が提唱する「石井式漢字教育」では、まず読み方から教える「読み先習」を実践しています。最近では、文部科学省でも遅蒔きながら、本格的とはいえないまでも、この「読み先習」を取り入れるようになっていきます。